

寺は、利長卿・利常卿の時現住慶學和尚等御懇意也。故に利長卿より眞筆の親簡を賜ひ、利常卿より御自書を賜はり、于今傳來す。利長卿の眞筆は文字消えて、全文詳かならず。寫如左。

ごくらく寺のしやうにん

だいかんいまりのやう

、、、、、、、、

、、、、、、、、

ハはうき は ひ

金澤妙慶寺兩種持參、怡悅之旨可申聞者也。

八月十二日

印

富田 善左衛門

爲見舞飛脚、殊竹子一箱贈給候、令悦喜候、猶追而可申伸候。恐々謹言。

三月五日

中納言利常判

妙 慶 寺

大千代疱瘡就平驗、爲祝儀第一折到來、欣悦之至候、謹言。

卯月十六日

中納言利常印

妙 慶 寺

遠路爲見廻<sup>(見舞)</sup>紐<sup>(紐)</sup>一箱・醒井餅一箱送給、欣然之至候。去年以來所勞之由、養生尤候、謹言。

二月廿五日

肥前利常判

慶 學

同名筑前果申砌、預御書忝存候、爲御禮如斯候。恐々謹言。

四月晦日

利 判

ハ 慶學御同宿中

利 治

右の外にも尙ありといへども、今悉く記載せず。利常卿御直書掛軸の箱書付如左。但在印。

松竹梅三幅對

利常様御筆

○妙慶寺三塔司

養壽院・慈眼院・寶珠庵といへり。寺記に云ふ。藥師如來之堂主は養壽院、觀世音菩薩之堂主は慈眼院、地藏菩薩之堂主は寶壽庵也。右本尊木像、慶長年中戰國之時分、御城中御

堀井さらへ之節掘上るに付、御預け相成、各堂之本尊と成、

堂主を付置處、無檀に付次第に破損し、無據堂宇取疊む。

とありて、彼の佛像共今は妙慶寺の本堂脇に安置すといへり。

按ずるに、右佛像共金澤城中堀の井さらへの時掘出でたるを、御預け相成るとの傳説に據れば、天正のいにしへ城中本源寺の佛像なりしが、尾山落城の頃堀の中に埋もれたるものならんか。養壽院以下三塔司を取た、みける年曆は

詳かならず。三箇屋版の六用集に、既に其の名を記載せざれば、享保以前の事ならんか。妙慶寺由來書に、享保十八

年野町邊火災後、妙慶寺坂修造被命時、別院慈眼院屋敷暨門前地等七拾二歩餘を爲御用地切出し、翌年石坂町に於て替地拜領仕。とあれば、既に敷地のみなりしと聞ゆ。

○加波貞右衛門傳

從前妙慶寺門前に加波貞右衛門とて、數代爰に居住し、扇子を製造するを家職とす。此の扇子は加波扇と稱し、當地の名産にて、舊藩中は幕府へ獻品の一種とせられ、則ち加

波貞右衛門へ命ぜられたりといへり。金澤町會所留記に載せたる横目肝煎より書出しける天明五年正月の詮議書に

如左あり。

妙慶寺門前 加波貞右衛門

右加波扇子細工仕候者何軒御座候哉、唯今に而も細工仕候哉、且何れの御支配之者に候哉、御尋に付承合候處、當時

右貞右衛門之外加波相名乗、扇子細工仕者無御座候得共、貞右衛門一家共之内、御郡方番代扇子屋宗右衛門与申者、加

波扇子之儀能傳授仕罷在候に付、貞右衛門若年に付御用被仰付候節は、右宗右衛門手傳仕、御用相勸申候。尤御献上

等之御用、七拾ヶ年餘相勸來申候旨御座候。貞右衛門儀妙慶寺門前に罷在候間、御支配違之者に御座候。以上。

巳正月

横目 肝煎

按ずるに、天明五年より七拾ヶ年以前は享保元年也。されば寶永・正徳の頃より幕府獻備等の扇子を命ぜられ、製造せし事知られけり。加波扇と稱する扇子は、加賀骨の扇といふものならんか。梅室句集に、

加賀骨のあふぎもて來て、今日の命式に奉るとて。

雪をれの竹も時得て扇子哉

或は云ふ。舊藩中は藩侯の持ち給へる扇子は、皆此の加波